

一〇ノ四、笠置寺再興勸進状

出典 笠置寺所蔵の原本より

解説 元弘の役で焼失した笠置寺再興のため、文明十四年（一四八二年）に貞盛が作成した勸進状。

この勸進状は、上下に金界線を引き欄外には金銀切箔野毛を散らし、紙背にも銀切箔を散らした華麗な装飾料紙に当代の能筆が筆を執っている。室町時代の典型的な勸進状であるというばかりでなく、度重なる被災で史料を失った笠置寺の数少ない根本資料の一つとしてその価値は高いといわれている（京都府教育庁指導部文化財保護課技師米谷優氏）。この勸進状は平成三年（一九九一年）京都府指定文化財となった。

平成十九年、阪大文学部中山氏により初めて学術的紹介がなされた（笠置寺再興勸進状・翻刻と釈文）。

原文

勸進沙門貞盛敬白

請特蒙十方檀那助成再興当寺焼失精舍兮、祈請都鄙之安全、成就貴賤之願望状
右笠置寺者尋其地者、耆闍崛山之靈峯、月支来現之甲区也、謂本尊者觀史多天之教主、化人刻彫之石像也、置感応於天武之歡願、開基趾於白鳳之明時、爾来利生日新、靈驗月盛、彼延喜聖代、日藏上人、登当山致精勤時、化人告曰、此山有池、方四十里、池内七宝滿、其池上弥勒御座、則兜卒内院云々、然則、一踏此地輩、契值遇於知足之上生、一拝此尊族、期得脱於龍華之下生、加之、実忠和尚者、入龍穴親見兜卒勝妙之境、解脱上人者、卜蟄居新得明神降臨之瑞、勝地異他、何処比之、惣代々崇敬、種々奇特、不逞具記、爰元弘歲次、雖合狼煙成災恨、永徳辛酉、更作鳳薨復旧構、喜而不経幾年数、応永第五曆忽有不慮之火災重及伽藍之回録、其後斧斤之計久絶、土木之営永廢、嗟呼、縁合故生之昔、則飭蘭若於春花、縁離故滅之今、空埋礎石於秋草、舍残之類誰不悲乎、方今貞盛殊承一寺之群議、勵建立之願念、專勸十方之檀那、乞再造之資助、不憚寸鉄尺木、無恥一紙半錢、貴不見乎、泰山起微塵、巨海始於一滴、仰願者、衆望早滿、大功速成、則結縁之尊卑、随喜之緇素、皆誇寿域遊福庭、悉越苦海到楽邦、仍勸進状如件

文明十四年七月日

勸進沙門貞盛^{敬白}

読み下し文

勸進沙門貞盛敬つて白す

特に十方檀那の助成を蒙り、当寺焼失の精舎等を再興し、都鄙の安全を祈請し、貴賤の

願望を成就せんことを請うの状

右笠置寺は、其の地を尋ぬるに、耆闍崛山の靈峯、月支（釈迦のこと）来現の甲区（勝れた区域）なり。謂へらくは、本尊は觀史多天の教主（弥勒菩薩）にして、化人（仏が衆生を救う為に人の姿となつて現れたもの）刻彫の石像なり。

感応（仏の人に応じた働きかけと、人がそれを感じ取る心の働き）を天武の叡願（天子が神仏に祈願すること）に置き、基趾（もと）を白鳳の明時（太平の世）に開く。爾来（それ以来）利生（仏のりやく）日に新たににして、靈驗月に盛りなり。

彼の延喜の聖代、日藏上人、当山に登りて精勤（勤めはげむ）を致す時、化人告げて曰く「此の山に池有り、方四十里。池の内に七宝満ち、其の池上に弥勒御座します。則ち兜卒の内院なり」と云々。

然らば則ち此の地を一踏せるの輩、知足（知足天、弥勒のいる天）の上生に於いて値遇（巡り会うこと）を契り、此の尊を一拝せるの族、龍華の下生に於いて得脱（煩惱を断じて菩提を得ること）を期さん。

しかのみならず加之、実忠和尚、龍穴に入り、親しく兜卒勝妙（勝れている事）の境（場所）を見、解脱上人、蟄居（一時引きこもること）をトび、新たに明神降臨の瑞を得る。勝地たること他と異なり、何処（いずれの処）かこれに比せんや。惣じて、代々の崇敬（崇め敬う）、種々の奇特（珍しい不思議なさま）、具に記すに違あらず。

爰に元弘の歳次（年まわり）、狼煙合じて、変災（思いもかけぬ災難）の恨みを成すと雖も、永徳辛酉（一三二一年）鳳臺（美麗な建物）を更作（改めて作ること）し、旧構を復旧す。

喜びて幾数年を経ざるに、応永第五曆（一三九八年）、忽ち不慮の火災有り、重ねて伽藍の回録（回禄、炎上すること）に及ぶ。其の後、斧斤（建築のこと）の計久しく絶へ、土木の営み永く廢る。

嗟呼、縁合うが故に生ずるの昔、則ち蘭若（寺院のこと）を春花に飜るも、縁離るるが故に滅するの今、空しく礎石を秋草に埋め、舎（いおり）を残すの類、誰ぞ悲しまざらんや。

方に今、貞盛殊に一寺の群議を承り、建立の願念に励み、専ら十方の檀那に勧めて再造の資助を乞う。寸鉄尺木を憚らず、一紙半銭を恥ずるなく、貴しと見ざらんや。

泰山（中国の名山、五岳の一つ）は微塵（細かい塵）より起こり、巨海も一滴に始まる。

仰ぎ願はくは、衆望（多くの人々からかけられている期待）早く満ち、大功（大きな事業）速やかに成らんこと、則ち結縁の尊卑、随喜の縑素（僧侶と俗人）皆寿域（長寿の境）を誇り、福庭（寺院の尊称）に遊び、悉く苦海を越え、楽邦に到らんことを。

仍つて勸進の状件の如し。

文明十四年七月日

勸進沙門貞盛 敬つて白す